

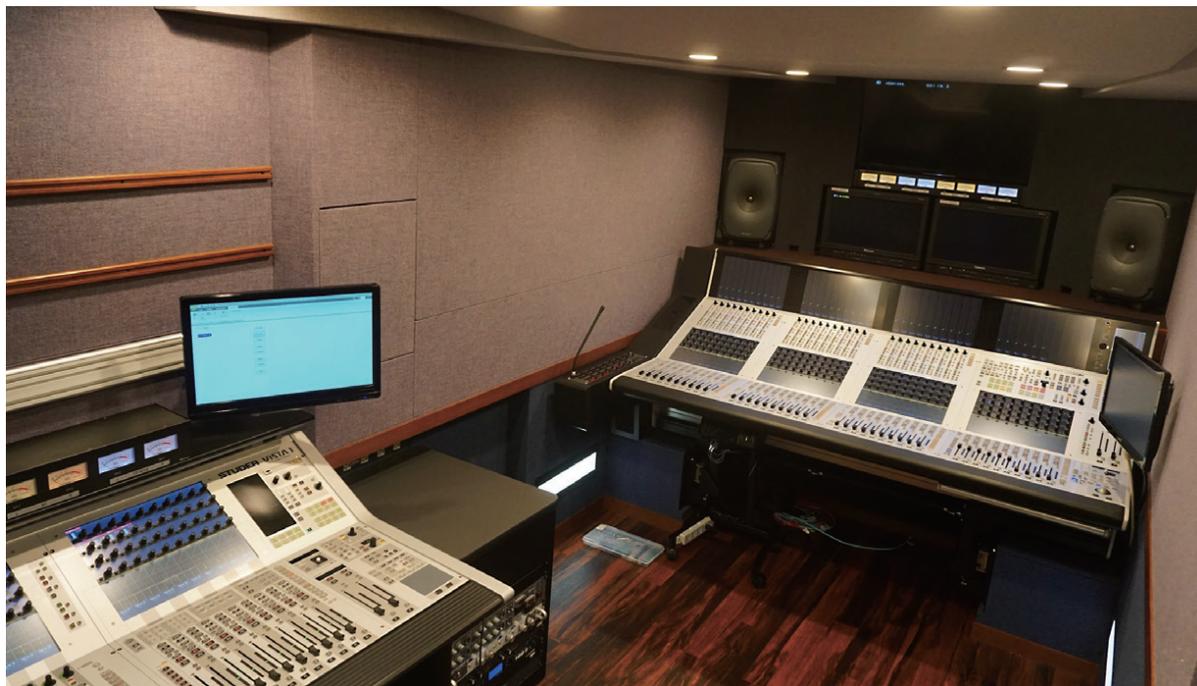
VISTA X / VISTA 1 ユーザーレポート

東海テレビ放送株式会社様

Vista X-42F / Vista 1-22F



音声中継車にVistaシリーズを導入



東海テレビ放送株式会社
技術局 映像制作センター 制作技術部
倉地 洋介

D950M2からVISTA Xへ

2002年に導入した旧音声中継車は、STUDER D950M2を採用、弊社では初となるフルデジタル卓の導入でした。D950M2は、操作性もシステム概念もわかりやすく、EQやComp等のパラメータは、触ったとおりに変化するデジタルならではの明快さがあり、非常に使いやすい卓でした。東海テレビの番組を10年以上に渡り、共に作ってきたことを考えると、とても愛着もありました。今回の更新で、卓を選定するにあたり、数社の音声卓が候補に挙がりましたが、音声中継車の場合、1人でオペレートすることが多いため、スタッフ全員が音声卓のシステムに習熟していることが重要と考え、スタジオにも導入しているVISTAシリーズを採用しました。また、車両は小型化しつつ、可能な限り制作室を広くとれることにも留意しました。コンパクトなデスクサーフェスであるVISTA X-42Fは最適な選択であったと思います。

システム

旧音声中継車は、音声はフルデジタル・システムに移行する前であり、映像もHD化の前であっ

たため、基本的に映像・音声ともアナログ中心のシステム設計でした。今回、使い勝手のいい部分は踏襲しつつ、システムはフルデジタルを基本とし、MADIを使い、より汎用性の高いシステムを目指しました。ステージボックスは必要に応じて出先に持ち出し、車載時の運用では、AJ盤経由で接続をしたことで、従来通りの車載HA/ADとしても違和感なく使えるシステムとしました。さらにMADIによりマルチ収録も容易になりました。

サブコンソールVISTA 1

サブコンソールとして、VISTA 1-22Fを採用しました。サブコンソール台は可動式にし、番組に応じた配置を変えて運用しています。通常はメインコンソールとL字に配置し、EMG卓として使用しています。メインコンソールにトラブルが発生した際には、EMGスイッチによりワンアクションでメインコンソールからサブコンソールの出力に切り替えるシステムとしました。大型中継ではメインコンソール後部に配置し、まさにサブコンソール(Pre MIXやオーディエンスMIXなど)としての運用や、2プログラム制作時の卓として使用します。音声中継車を使用しない番組ではVISTA 1を持ち出して使用することもあります。メインコンソールと同一メーカーにしたことで、操作の統一性だけでなく、ステージボックスも共有でき、運用の幅も広がりました。

モニター環境

映像モニターは、メインモニターとして18.5インチを2式、16分割素材モニターとして32インチを1式導入し、より多くの映像を確認できるようになりました。メインスピーカーは、GENELEC 8351A 3way同軸スピーカーを採用、初めて使うモデルで不安もありましたが、日本音響エンジニアリング様の室内音響調整により、良好なモニター環境を構築して頂きました。内装デザインも落ち着いた空間になり、集中してミキシングできる環境に仕上がったと思います。

最後に

今後の東海テレビの番組制作で十分に活躍できる音声中継車が完成しました。STUDER様には、システム構築だけでなく、車両設計から内装設計まで、さまざま工夫を共に考えていただき感謝しております。最後に、ご協力を頂いた関係各社様に厚くお礼申し上げます。

